企業と女子大学が本気で向き合う「自分らしいリーダーシップ」開発

共立女子大学／ビジネス学部

Kyoritsu Women's University

「リーダーシップ教育」を核に据え、共立女子大学に2020年4月誕生した「ビジネス学部」。時代に即した“自分らしいリーダーシップ”を探求し、養成する独自のプログラムは、協力企業にとっても新しい人材育成の形となりつつある。

取材・文／草苅敦子

これからの日本に求められる女性の「リーダーシップ」

女性が働きやすい環境づくりはいま、社会全体で進められつつある。少子高齢化によって労働力人口が減少し続ける日本にとって、女性の就業率の引き上げは課題のひとつ。待機児童解消に取り組む自治体、出産・育児からの仕事復帰やキャリア継続など、仕事とプライベートの両立を支援する企業も増え、女性の労働人口は顕著に増加している。

その一方で、日本の「女性管理職」の割合は、世界と比較しても依然低い状況が続く。内閣府男女共同参画局のデータによると、女性の管理職が少ないのは、「仕事と育児の両立が困難」であること以上に、「現時点で、必要な知識や経験、判断力等を有する女性がいない」ことを約半数の人が理由として挙げている。日本における女性のリーダーシップ育成は急務であると言える。

AI時代をサバイブするための「ビジネス」の知識とスキル

共立女子大学は、建学の精神「女性の自立と自活」のもと、専門的知識と高度な技能を修得する職業学校として1886（明治19）年に創立。時代とともに進化しながら、たくましく社会を生き抜く職業人としての女性を育み続け、女性社長も数多く輩出してきた女子大学である。そして2020年4月には、ビジネスに必要な専門知識とリーダーシップを備えた女性を養成する「ビジネス学部」が新たに誕生した。

「そう遠くない将来、約80％もの女性が65歳まで働き続ける時代が到来し、その一方で、単純な事務作業はAI（人工知能）に代表される新技術によって代替されることが想定されます。そのため、AIがとってかわれない職種に就くことが重要となります」と、植田学部長は語る。

ビジネス学部では、そんなAI時代を生きるビジネスパーソンを養成すべく、ビジネスに必要となる「経営」「マーケティング」「経済」「会計」の主要4分野を学修し、『リーダーシップ開発プログラム（LDP）』をベースとした体験型授業で、修得した知識を〝使える〟状態にしていく。経営・経済の基礎知識をベースに、ビジネスの課題をグループワークで解決していく授業を通して、人間力をビジネス環境で活かしていく能力を育む。

株式会社 吉野家
渡邊 亨 氏

（上）「女性を含む多様なお客様が利用する『吉野家』を実現するための戦略」という課題に対し、学生たちはチームごとにビジネスプランを提案。（左下）グループワークやポスターセッションを重ね、最終プレゼンテーションに向けてプラン内容を練り上げていった。（中下）約半年間に及ぶ学生とのプロジェクトを通じて、人材活用のスキルや知識など、企業の社員が得るものも大きい。（右下）「私たちが社会に出てから学んできたスキルや行動力を、大学教育の中で経験し、実践から身につけることができるというのは非常に羨ましいですね」（渡邊さん）

Interview

「自分らしいリーダーシップ」が多様化するビジネスを支えていく

ビジネス学部
専任講師
岩城 奈津 先生

リーダーシップは、当事者が本気になれる課題や環境を与えなければなかなか発揮しないものです。ビジネス学部で実施する『リーダーシップ開発プログラム』は、学生のリーダーシップ教育としての役割だけでなく、協力企業の社員にとってもスキル開発の絶好の機会となるプログラム。企業側にはお互いが本気で向き合えるリアルな課題を提示していただき、それを受けた学生たちは、困難だけれどもやりがいのある課題解決のプロセスを少人数のチームで取り組んでいきます。チームみんなで圧倒的な体験をして、メンバーでそれを一緒に振り返る、そのことに重きを置いています。

私たちの考えるリーダーシップとは、リーダーという特定の役職や人物が発揮するものではなく、チームが目標に向かって進むときに、メンバー一人ひとりが自分の得意分野や強みを発揮していくものと捉えています。いまは階級や役職の少ないフラットな組織や、ホラクラシー型※のプロジェクトも多く、チーム全員でプロジェクトを回していく、というビジネスの形態も増えています。企業も人材も多様化する社会では、このようなチームの中で貢献するための多様なリーダーシップがますます必要になっていくことでしょう。国籍にも性別にも囚われない、学生一人ひとりの個性にあった「自分らしいリーダーシップ」の開発が私たちのめざすところなのです。

※ホラクラシー型…トップダウン型とは異なり、決定権を組織全体に分配し、メンバーが能動的に活動できる組織管理体制

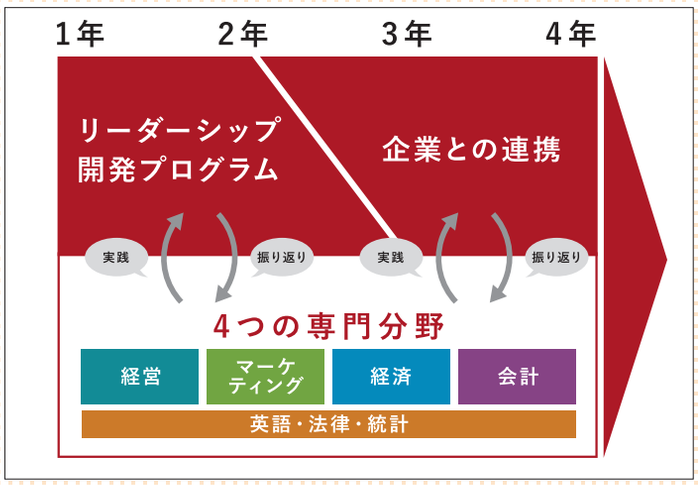
Information

共立女子大学

1886年、女性に専門的知識と高度な技能を修得させ、女性の自立と自活の力を育成することを目的として創立。以来、時代の要請に応え、幅広く深い教養および総合的な判断力を培った、社会に広く貢献する自立した女性を輩出し続ける。家政学部・文芸学部・国際学部・看護学部を擁し、2020年4月にはビジネス学部を開設した。

●DATA
東京都千代田区一ツ橋2-2-1
TEL 03-3237-5927
URL https://www.kyoritsu-wu.ac.jp/

● ビジネス学部　学びのしくみ



【主要4分野の専門知識】・【リーダーシップ開発プログラム（LDP）】・【立地を生かした企業との連携と実践】を3つの柱とし、4年間を通じて知識の修得と実践、振り返りを何度も繰り返していく。主要4分野の知識は統合化し、「知っている」から「使える」知識に転換。成果目標を共有し、自ら主体的に動き、周囲や他者を支援する「リーダーシップ」を実践的に磨く。

企業×大学が本気で取り組むリーダーシップ開発PBL

『リーダーシップ開発プログラム』は、ビジネス学部開設に先駆け、2017年から教養教育科目として開講。企業が抱える課題に対して学生がビジネスプランを提案する演習科目として、過去には飲料メーカーやセレクトショップなどと連携してきた。2019年度は、牛丼でおなじみの「吉野家」と女子大学という異色の組み合わせで、学生と中堅社員のリーダーシップ教育に臨んだ。

プログラムはPBL（課題解決型学習）形式で行われるが、一般的なPBLと異なる点は、協力企業が一方的に課題を提示するだけでなく、企業側の社員もほぼ毎回の授業に出席。学生たちのグループワークに参加し、ともに議論を重ねていく。

また、プランの完成度以上に〝プロセス〟を重視することも特徴だ。チームで成果目標を共有し（目標共有）、自ら主体的に動き（率先垂範）、メンバー同士が助け合いチームとしての力を最大化する（相互支援）。この3要素をメンバー全員が発揮し、成果を挙げること、そして「自分らしいリーダーシップとは何か」を探求することが、このプログラムのめざすところだ。約半年間参加した吉野家　事業推進部の渡邊さんは、「ひとつの目標に向かって、チームの一人ひとりが役割を果たし、行動していくことの重要性を、学生たちの姿を見て再確認しました」と振り返る。

ビジネス学部では、このリーダーシップ開発プログラムを1・2年次の必修科目として実施する。これからのリーダーシップは、チームの先頭に立つ一人だけに求められるものではない。「自ら主体的に動き、周囲や他者を支援する」次世代型のリーダーシップを備えた女性たちが、新しい時代のビジネス、そして社会を担っていく。

ビジネス学部
学部長
植田 和男 教授
マサチューセッツ工科大学博士課程修了（Ph.D.）。東京大学経済学部学部長などを経て共立女子大学ビジネス学部長。経済学博士。